

---

# 新しい世界へのいざない

彦星こかぎ

---

## 注意事項

このPDFファイルは小説サイト「小説家になろう」で掲載中の小説を、「PDF小説ネット」の変換システムが自動的にPDF化したものです。この小説の著作権は作者にあり、作者または「小説家になろう」および「PDF小説ネット」を運営するウメ研究所に無断でこのPDFファイルおよび小説を引用を超える範囲で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止します。小説の紹介や個人用途での印刷および個人用途での保存はご自由にどうぞ。

### 【小説名】

新しい世界へのいざない

### 【Nコード】

N8529B

### 【作者名】

彦星こかぎ

### 【あらすじ】

受験に向けて勉強する主人公。と、そこへ……？ファンタジーでもなくホラーでもない、微妙なお話。

(1)

それは今日取り掛かった中でも、とりわけ難しい設問だった。

式全体に文字を与え、数列として扱うことで原始関数を求めるのだ、ということとはわかるのだが、途中で必ず意味の分からない積分をしなくてはならない。そういう公式は確か存在しなかったから、どうにか式変形しなくてはならないのだが、分数を有理化しても式を置き換えても上手くいかない。数学的帰納法や相加相乗平均が使える隙もない。

頭にくる。しかし、これを解かないと次に進めない。

全く新しい考えが浮かばず、稚拙な絵ばかりがノートの端に並んでいた。

そのとき。

ふと後ろを振り返ると、スタンドミラーの中に、若い男が一人立っていた。

「……え？」

私は平然と、そう聞いた。出てきた声が、後ろに家族がいたときと全く変わらない口調であったことに、自分で驚いた。

ちょうど勉強机の背後に立ててあるスタンドミラーは、今日のところは部屋を映す気がないらしい。大半は大写しになった彼の全身で埋められていて、その背後にはただ薄青い波紋が揺れているだけだ。

彼には体型的な特徴がなく、背も高くはない。深い紺色の髪はあちこち、重力を無視した方向にはねていて、水色の瞳の上にもいくら

か被さっている。服はとにかく白。上着は丈が長く、ブーツの先は丸い。ベルトのバックルには、目が痛くなるほど複雑な模様が浮き彫りにされている。

「初めまして」

小さくお辞儀した白い男の声はどこまでも爽やかで、力強く、優しい。

聞いたことがないようで、あるような声だ。

「貴方は、我らの神が選んだ救世主。どうか私と共に、我らの国にいらしてください。我らは貴方を、姫君として迎えたい」

私はゆっくり呼吸して、それからこう答えた。

「どうして……どうして今頃になって現れるの!？」

白い男がたじろいでいる間に、私は再び息を吸った。

「……確かに私は、ずっとそんな誘いを待ってた。自分は選ばれて、特別で、普通じゃないことをするために生まれたんだって思ってたよ。でも……」

やっと最近、やりたい事を見つけたのに。

勉強も悪くないって、思い始めたのに。

魔法使いになるより面白そうな仕事も見つけたのに。

どうして……今になって。

(2)

白い男は少々面喰らったようだが、小さく息をついた。

「それは……もちろん、すぐに了承していただけたとは思っていませんでした。ですが、……我らは貴方を必要としています。こちらに来ていただきたいのです」

私には、彼らの世界へ行くのがどういう感触なのか、簡単に想像できる。鏡は今、まるで垂直な水面のようになっていよう。指で触れれば、ガラスの表面は波紋を起こし、吸い込むように指を、指につながる私を、その内部へと引っ張っていくだろう。水中……しかし厚さはせいぜい二センチだ……のようなガラスを抜ければ、新しい空気が広がっている。薄青い波紋が揺れる、とろりとしたあまいな世界。おそらく重力はほとんどない。そして白い男は私の手を取り、彼の国に私をいざなう……

私はそれを知っている。

そのとき。

ふと左を見ると、ベランダに羽の生えた女が立っていた。

「……………え？」

「誰ですか？」

私は聞いた。白い男も聞いた。

羽の女は心配そうな顔つきで、ベランダへ通じるガラス窓を軽くノックした。白い羽は……あえて言うとな蝶のそれに似ているが、もっとシンプルで、もっと光り輝いている。

「ああ、もう……ずっと探してたのよ。その顔じゃ、全部忘れてしまったのね？」

「全部、って？」

「貴方はほんの十七年前まで、穢れなき神聖なる一族にいたのよ。私は貴方のこと、とても大切にしていた……貴方はこの穢れた世界で迷子になったの。ずっと探したんだけど……こんなおぞましい生き物の体に取り込まれていたなんて。でも早く見つかってよかったわ。今すぐ戻っていらっしやい」

羽の女は、しなやかに揺れる長い髪全体で不安を表した。羽衣、と呼ぶにふさわしい薄青色のひらひらした衣服は、非日常性という点では白い男といい勝負だ。

「……どうすればいいの？」

誰ともなしに聞いた。

「お好きなように」

白い男は平然と答えた。

「……来てほしい？」

「もちろんです」

「『来る』じゃないわ、一緒に帰るのよ」

羽の女に従ってベランダに出たらどうなるのかも、私には簡単に想像できる。彼女が一言二言、秘密の言葉を唱えた瞬間、私は光に包まれるだろう。光の繭の中にすっかり封じられて、私のおぞましい体は壊れてなくなってしまうだろう。そうすると私には元の姿が戻り、輝く羽が再び背中に生え揃う。羽衣を身につけて繭を出た私を、羽の女は優しく抱きしめ、そして至上の 神聖なる世界 に戻るべく、ベランダを飛び立っていく。

飛び立つ。遠くへ。遠くへ。遠くへ。

私はそれを知っている。

「……ごめんなさい。私は行けない」  
私は……

白い男はうなずく。

「それも、覚悟していました」

羽の女は首をかしげる。

「そう……まあ、体の寿命が終わるまで待つてあげてもいいんだけどね」

そして羽の女は白い男を促して、二人の一致した意見を口にさせる。

「しかし貴方は……私がここを去った後、決して後悔しませんか？」

「……わからない、けれど」

彼が彼女についていった後、後悔しない自信もない。

白い男は彼の国に私を連れて行くだろう。

彼の国は。彼らの国は。……どんな国だろう？

姫となる、私は？ 私はどうだというのだ。

姫と……なった、その後の私は。

羽の女は私を導いて遠くへ飛んでいくだろう。

遠くへ……どこまで？

穢れなき神聖な場所まで。

そこに……降り立ったら、その後は？

「確かに私は、貴方たちを望んでいた。不思議なことが起きて、ここじゃない場所へ行きたい、って思ってた。だけど……そうして、

その後どうするべきかわからないの。その後、何をすればいいのかわからない。でも今の私には、今のまま暮らせば、やりたい事がある。それも漠然としてるし、うまくいく自信もないけど……でも、これから何をすべきか、わかるの」

彼らを望んでいたのは、もう少し昔の話だ。中学時代とか……あの頃はまだ現実にも先の見通しなんてついていなかったから、その日常生活で勉強して休息するのに精一杯だったから、全く新しい場所への招待をあっさり受け入れられたのだ。

その頃ならば私は、喜んで白い男についていったらう。羽の女に抱き締められる事を嬉しく思ったらう。先のことなんかまるで考えずに、新しい世界からの誘いに容易く応じたらう。

……あの頃は、毎日が辛かったから。

苦しいだけの日常から、一刻も早く抜け出したいと思っていたから。

「私はもう、知っているんだ」

白い男の事も、羽の女の事も、ずっと昔から知っていた。

「あなたたちも、みんな幻想だった」

そして、白い男と羽の女は一瞬で消えた。

どちらも、随分前にしばしば考えた想像の登場人物だった。私にあくまでも忠実な、異国の美青年。常に安心を与えてくれる、異世界の女性。私を迎えに来るその瞬間だけをエンドレスで流し続けるアニメーション……そんな愚かしいお話の登場人物たち。

幻想は、もう……いらぬ。

あの頃は、自分が夢見る力を失うことを本当に恐れていた。これが幻想だと認めてしまふ大人になるのが嫌だった。それは今でもそうだ……そして私は間違いない、想像することをやめない。直接それを形に出来なくても、いつか何かを作るときに、それが役立つと

も信じている。

けれども、心から実現してほしいと願うての幻想は……もういい。いい加減、区別しなければならぬ。

それは自分をほんの少し、後ろ向きに楽しませるだけで、何の役にも立たないのだ。

誰かを喜ばせることも出来ない、自分を高める役にも立たない、ガラクタの幻想たち。

……それらには、そろそろ別れを告げなければならない。

そのとき。

誰かが背後から私の腰に抱きついた。

「君は、とても悲しいことを言うんだね」

それは、言ってみれば……黒い男。

「貴方のこともしよっちゅう想像したね」

黒衣に身を包んだ、黒髪青年。私を迎えに現れる異界人の一人

……

「そうだね。そして君が想像したなら、僕は本当に存在するんだよ」  
彼に関しては、現れるのに窓も鏡も必要ない。常に、気付いたら私のすぐ傍にいる。

「これは、幻想、だよ……」

「幻想？ それじゃあ、僕が君を抱き締める感覚も……これは幻想かい？」

黒い男の腕は、強く私を締め付ける。波打つ黒衣が私の体をいくらか包み込む。足を撫でるベルベットの感触は妖しく、くすぐるようで貼りついてくる。

「君がどれだけ拒否しても、僕は決して消えたりしないよ」  
そんな風に、私が想像したから。

「嫌……」

「あれ？ 君、ひよっとして怯えているのかい？ 君が作った僕に？」

黒い男はさも楽しそうに、私の顔を覗き込みながら笑う。

「それは嬉しいな……君は僕をそういう風に作ったものね。君が怖がってくれないと、物語は盛り上がらないもの」

私はもうすっかり彼に抱き上げられてしまっている。

私は幻想の一つとして黒い男を想像した……他と比べて異質だという認識はなかった。けれど確かに彼は、無理強いして私を連れて行く力を持つ唯一の存在だった。

「君は随分たくさん、僕の話を作ってくれたよね。それじゃ、実際にはどうしよう？ テレビ画面からがいいかい？ それとも、床か

壁に『穴』を作るのか？」

彼は、詩的に話すのが好きだった。狭い空間を通り抜けるのも。「どうやって君を閉じ込めてしまおう？ 小瓶に入れる？ それとも風船に閉じ込める？ でなきゃ、小さなお人形に変えてしまおう？ 使い魔に食わせるのもいいね。悪鬼？ 蜘蛛？ 植物っていうのもあったね」

全部、私が想像したのだ。  
私がそうなるように。

毎日が苦しくて、苦しくて、でも何も出来なかったから。  
耐えて耐えて、それも限界だったから。

何をする気も起こらなくて、何もしたくなくて、  
逃げたかったから。

だから私は、想像することで逃げて隠れた。  
だから私は、彼を作った。

もう

消えてしまいたかった から

けれど。

「……でも、嫌。本当に、行きたくない！」

もう私は気付いてしまっているのだ。

その種の幻想が一番、たちが悪い……連れて行かれる、という強烈な印象ばかりが強くて、その後に残るものが全くない、救いようのない物語。

その中で私が快感を覚えるとするならば、それはその一瞬にしかない。誰かにさらわれていく、そして誰かの物になる、誰かに所有

されてしまうその瞬間。緩やかに自分の意志が消えて、物体になって、そして私を心から愛でてくれる誰かのなすがままに、封じられる。

それは快感だ。間違いなく、私にとっては堪らないほどの。

確かにその想像はいつも、私を興奮で身震いさせた。白い男だつて、羽の女だつて、想像の根本にあるものは大して変わらない。抱き上げられ、拘束され、動けなくなって、自分ではないものにさせられる、それは確かに一種の快感だ。

でも、私はこの事も気付いてしまっている。

その快楽は、結局一瞬でしかない。誰かに所有されたと感じた、その一瞬で終わってしまう。その後にはもう……全く何も残らない。「私は……、ものなんかじゃない!」

「嫌かい?」

黒い男は笑う。

「でも、そこで無理を通すのが僕の仕事なんだよね……ほら」

目の前の壁には、人がくぐれるほどの黒く渦巻く穴が開いている。

黒衣が流れる……吸い込まれている。

彼が私を放り投げれば……一瞬の陶酔と永遠の虚無、それで終わるだ。

「ね、一緒に行こうよ」

私が本気で叫ぼうとした、その一瞬で。

急に全てが消え去った。

私は椅子の上に落ちた。ちょうど横向きに座れている。黒い男も、吸引力を持った穴も消えてしまって、跡形もない。部屋の中に動く

ものはなく、聞こえるのは窓の向こうの喧騒だけだ。

いや……もう一つ。あまりに日常的で気付かなかったけれど、稚拙すぎる電子音が机の上で鳴り響いている。

……携帯電話。

反射的に開くと、他愛もない雑談のメールが届いていた。

「……そつ、か」

私には仲間がいる。

それが、あの頃と今との唯一の差。

メールに返信して、机に向き直った。

……とりあえず今はまだ、解答集を見てもいい。次で、本番で、ちやんと対応できればいい。

あの頃行きたくて堪らなかった新しい世界は、決して今の場所と隔絶されているわけではなくて……だから、自分から足を進めなければならぬのだらう。

そしておそらくその先に、いざないはもう用意されている。

(4) (後書き)

彦星こかぎです。

読んでくださってありがとうございます。

これは私の大学文芸部デビュー作品です。後半が拙い感じではありますが……

これからもよろしくお願いします。

# 広告募集中

小説関連広告に最適です。

出版社や印刷会社はもちろん、  
個人の広告でもOK

縦：140mm 横：110mm

詳しくは PDF 小説ネット広告募集をご覧ください。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネットは2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n8529b/>

---

新しい世界へのいざない

2009年5月29日23時52分発行